

# まち歩き観光の弁別性と分析基準

## The Distinctiveness and Analytical Criteria of Town Walking Guided Tours

越智 正樹\*

Masaki OCHI

事業の費用対効果への説明要求が厳しさを増し、また機械的ガイド等の技術革新も盛んな今日において、まち歩き観光はその継続発展のために、他の観光形態との弁別性と成果（特に社会的効果）の説明可能性を高めることが求められている。だが、そのいずれを説明するにおいても、十分に論理的な基準は構築されてこなかった。本論の目的はこのうち、まち歩き観光の弁別性について、ツアー内容の分析基準を提示することにある。まち歩き観光およびツアーガイドに関する諸論考に依拠して本論は、①市民参画、②ツアーリーダー性の先行、③中間性感覚、④語りの特有性、⑤まなごしの革新と回収、⑥歩くことの意識、の6つの分析基準を導出した。

キーワード：まち歩き観光、弁別性、分析基準、社会的効果

### 1. 本論の目的

周知のように、2006年の「さるく博」以降、全国各地でまち歩き観光の取り組みが増加している。だが、その全ての取り組みが成功しているわけではなく、十分な成果が得られていないケースも散見されると指摘されている<sup>1)</sup>。もっとも、今日的まち歩き観光の嚆矢となった長崎さるくも、立ち上げ10年目を迎えてなお順風満帆というわけでもなく、少なからぬ課題を抱えている。2016年4月より価格設定を大幅に改定したのも、苦渋の対応策の1つであった<sup>2)</sup>。こと自治体が携わっている場合、事業の効果は説明可能でなければならない。

そもそもまち歩き観光の成果とか効果は、経済的効果に限定して語られたものではなかった。茶谷幸治は、市民が企画運営から全て携わることで「『まち』が市民のものになる」と述べ、それが「まちづくり」に繋がると強調している<sup>3)</sup>。これを換言すれば、地域的公共性の再構築が社会的効果として期待されるということである。ただ、地域的公共性の変化を測る指標は開発されておらず、少なくとも数量的に説明するのは極めて困難である。

また一方、昨今の技術革新により、例えばペン型音声ガイド端末やGPS連動音声ガイドアプリなどが開発され、人間のガイドがつかなくとも、誰でも手軽に詳細な情報を得つつマイナーな観光資源をも巡れるよ

うになりつつある。このような情勢の中でまち歩き観光は、機械的ガイドやスタンダードなガイドツアーとどのように弁別できる特性を持つのか、説明可能でなければならない。

このようにまち歩き観光は、その継続発展のために、効果と弁別性において説明可能性を高めることが求められていると言える。弁別性に即した基準で個々のまち歩き観光を分析した上で効果を論じなければ、議論は抽象的で雑感めいたものにとどまる。久保田美穂子らは国内の評判の高いまち歩き観光の特徴を整理したが<sup>4)</sup>、他の観光形態と比した弁別性の説明は十分ではなかった。本論は、ツアー内容における弁別性に焦点を絞り、諸論考に基づき、より包括的で論理的な分析基準を構築することを目的とするものである<sup>5)</sup>。

なおまち歩き観光については、財務形態や募集・研修形態、広告販売形態なども重要な分類要素だが、本論の射程には収められない。ただ上記分析基準が確立できたならば、これら形態のどのような組み合わせがどのような内容を高めやすいかといった分析も可能となる。

### 2. 諸論考に基づく分析基準の導出

#### (1) 市民の参画

茶谷<sup>4)</sup>が述べるように、(観光産業従事者ではない)市民がツアーの企画運営催行に携わるからこそ、日本のまち歩き観光の大きな弁別的特徴であると言える。

\*琉球大学観光産業科学部

よってまず、市民がツアーの企画運営催行のどこにどのように参画しているかが、分析基準の1つとなる。

## (2) ガイドの役割の古典的類型

現代的ツアーガイドの役割について古典的とも言える類型化を行っているのが E. Cohen である(表一)<sup>9)</sup>。①はツアーをスムーズに催行する役割であり、典型的には「僻地のネイティヴ」が行うものだという。②は参加者のアクティヴ化である。③は、参加者と地域の人々や場所との間に立つことである。④は端的に言えばインタープリテーションであり、普通は観光システムを中心に位置する地域外者が行っているという。Cohen は明らかに、ガイドの役割の重点が①から④へと移行することを是として議論している。

表一: Cohen(1985)による現代的ツアーガイドの役割のダイナミクス

	外面的	内面的
リーダー的領域	①原初的ガイド (道具性先行)	②盛り上げ役 (社会性先行)
仲介者の領域	③ツアーリーダー (相互行為先行)	④プロフェッショナルガイド (コミュニケーション先行)

久保田らはまち歩きガイドに求められる役割として、「道案内・情報案内者」「インタープリター」「コネクター」の3つを挙げているが<sup>9)</sup>、これはそれぞれCohenの①、④、③に当てはまるものだと言える。また久保田らは言及していないが、②の役割も当然求られている。しかしこの整理だと、まち歩きガイドとスタンダードなガイドとの弁別性はなくなってしまう。したがって、①～④のうち特にどれが先行しているかが重要になる。ガイドが市民であることに特徴があることを考えれば、特に③の先行性が分析基準の1つとなろう。

## (3) 中間性感覚の提供

ところで、まち歩きガイドがCohenの想定と異なるのは、①から④への移行が必ずしも是とされないことである。すなわちまち歩きガイドは、観光システムを中心には位置しない素人性と、地域住民としての(半)ネイティヴ性を保持しつつ、プロフェッショナルなインタープリテーションも同時に求められている。換言すれば、Cohenのダイナミクスの中にあって不安定

な立ち位置にとどまることを求められているのがまち歩きガイドだと言える。

こうした中間的位置を隠蔽するのではなく、むしろ参加者にも共有させることこそが、インタープリテーションにおいて重要である。博物館や史跡のガイドツアーを研究したP. Williamsは、現実と構築物、現在と過去、等のどちらにも属しているという中間性の感覚がリミナリティ(境界性)を生み、参加者の懐疑心を停止させ、それによって参加者はガイド対象のコミュニティと一時的に結びつく体験を得る、と論じている<sup>7)</sup>。久保田らは、評判の高い今日的まち歩きの特徴の1つとして「まちの暮らし」の疑似体験を挙げているが<sup>8)</sup>、この体験の鍵となるのが中間性の感覚であると言えよう。すなわち参加者に、訪問者と住民、集合的記憶の部外者と共有者、等のどちらにも属しているという感覚を提供できるかどうか分析基準の1つとなる。

## (4) 語りの内容の類型

まち歩き観光における語りの内容については、P. Lugosiらが有益な類型を提示している<sup>9)</sup>。①公然とした内容、すなわち誰でもアクセスできる一般情報、②あまり世に出ない内容、すなわち専門的な文献の渉猟や、現地文化に対して個人的知識を持つ人物を通じてのみ得られる、しばしば逸話的な情報、③私的な内容、すなわちガイドやその友人・知人の人生において、あるいは馴染みのある場所で起こった事についての情報、の3つである。ガイドツアーである以上、①は欠かせないものであるが、茶谷や久保田らは、まち歩き重要な要素としてガイド自身の想いを語ることを挙げている<sup>10) 11)</sup>。またP. Smithもスタンダードなガイドツアーの問題点の1つとして、一般的な認識をなぞるだけの語りや、エリート主義的な審美観に基づく語りを挙げている<sup>12)</sup>。後者は②にも該当し得るものである。したがって②や③、特に③の語りの比重が分析基準の1つとなる。

## (5) 風景/まなざしの革新とその回収

Smithはまた、ツアー中の単なる移動の空間がガイドの語りを断片化することを、スタンダードツアーの問題点として挙げている<sup>13)</sup>。しかしその何でもない空間にこそ、まち歩きがスタンダードツアーを越える可能性が秘められているという。そのためにSmithが提

案するのが、ランドアート等の野外芸術から学ぶことである。例えばルート造成において、地図上で資源ポイントを繋ぐのではなく、意味深い眺望を生むルートを選ぶのだという。意味深い眺望とは、その場から見える建築物の重なりとか、手持ちフレームによる切り取り等で生まれるものである。このようにして参加者に対し、その場限りの景観の物語を提供することの重要性を Smith は論じている<sup>14)</sup>。「ルート観光論」を提唱する高岡文章も、ルートが特有の風景／まなざしの体験をもたらすことを指摘しているが<sup>15)</sup>、Smith の提案はそこにさらにアートの革新を導入するものだと言える。

J. R. Wynn はよりラディカルに、まち歩きガイドは都市の錬金術師だと述べている。ガイドは、時にでっかあげや暴露話も駆使しつつ、都市の大胆な読替を提供しているのだという<sup>16)</sup>。もっともあまりのラディカルさは諸刃の剣である。橋本和也が述べるように、観光者は自らの認識がひっくり変えるような経験を望んでいて、と考えるべきではない。観光者は発地からすでに、特定の解釈枠組みに従った自身の観光ものがたりを進行させているのであり、予期しなかった事もそのものがたりに回収して認識可能となるよう手助けすることが、ガイドの役割として求められている<sup>17)</sup>。以上を踏まえて、風景／まなざしの革新と同時に、革新の回収も不可欠な分析基準となる。

### (6) 歩くことそのものの意識化

Smith はまた、スタンダードなガイドツアーの問題点の1つとしてまさに歩くことそのものに意識的ではないことを挙げ、ウォーキングアートから学ぶことを提唱している<sup>18)</sup>。ウォーキングアートとは、パブリックアートを歩いて巡るアートウォーキングとは異なり、歩くことそのものを作品とするような芸術活動のことである。もっとも、この種のアートは日本では馴染みがなく、導入は簡単ではない。一方、J. アーリも指摘しているように、歩きの様々な様態を分別する特徴の1つとして、フィットネス観念との関連の有無を無視することはできない<sup>19)</sup>。もちろん、茶谷がまち歩きは健康のためのものではないと述べているように<sup>20)</sup>、この要素のみが肥大すると健康ウォーキングとの差別化が損なわれる。しかしいざずれにしても、アートであれフィットネスであれ、歩くことそのものの意識化がスタンダードなガイドツアーとの弁別性の1つとなり得

るものであり、分析基準となることは確かであろう。

### 3. まち歩き観光の分析基準の整理

以上のように、スタンダードなガイドツアーとの弁別性を重視したまち歩き観光の分析基準は、整理すると表-2 のようになる。これらが同時に、機械的ガイドとの弁別性ともなることは説明を要しないだろう。

表-2: まち歩き観光の分析基準

	タイトル	概要
基準1	市民参画	ツアーの企画運営催行のどの部分に市民がどのように参画しているか。
基準2	ツアーリーダー性の先行	現代的ツアーガイドの役割のうち、参加者と地域の人・場所との間に立つことが先行しているか。
基準3	中間性感覚	訪問者／住民、現在／過去等のどちらにも属す中間性感覚を演出し参加者に提供しているか。
基準4	語りの特有性	公然とした内容より、あまり世に出ない内容や私的な内容(特に後者)に重点を置いているか。
基準5	風景／まなざしの革新と回収	参加者が体験する風景／まなざしに(アートの)革新を、参加者が混乱せず回収できるかたちで提供しているか。
基準6	歩くことの意識	歩くことそのものの意識化を提供しているか。

ただしこれらの基準は、必ずしも相互に排他的なものではない。例えば基準2と3は共に、素人でありかつ訓練を受けたガイドであり、住民でありかつ訪問者であるという、まち歩きガイドに求められる不安定な立ち位置をどのように演出して参加者に有効に共有させるかに関わるものである。また基準3と4は共に、まち歩きガイドの弁別的なインタープリテーションに関わるものである。

この両方にまたがる基準3と関連して、ガイドの出身地属性について付言しておきたい。一般的に観光者は、対象地域に所属しているか出身者である者を「真正なガイド」と認めがちであるが<sup>21)</sup>、この傾向は市民ガイドを謳うまち歩き観光において特に強いと考えられる。なかでもこの傾向は沖縄のまち歩き観光において顕著であり、県外出身ガイドにとっては時として悩

みの種となっている<sup>③</sup>。だが、中間性感覚の提供という点においては、必ずしも当該地出身者のみが優位であるわけではない。むしろ演出のあり方によっては、地域外出身者ならでの、住民／訪問者、所属／非所属の中間性感覚の提供を行えるのではないだろうか。もっともそのためには、ガイドやコースの属性に応じた演出が必要となろう。この点から言っても、この基準を用いた分析は、まち歩き観光の団体単位よりむしろ、催行コース単位で行われるべきものである。

基準5と6の際立つコースは、日本のまち歩き観光ではまだ十分な例を見ないかも知れない。ただ、例えば那覇まちま〜いでは2016年度のガイドによるコース企画コンテストにおいて、走りやウォーキングに重点を置いた2つの案が本選に残った<sup>④</sup>。また、例えばまいまい京都のあるツアーでは、裏路地の生活風景のアートのおもしろさに目を向けたガイドングが実践されていた。

#### 4. 結語

本論は、まち歩き観光を取り巻く今日の状況を鑑み、個々のツアーにおける弁別的特徴を論理的に説明するための分析基準を提示した。繰り返しになるが、今日の状況とは、まち歩き観光の弁別性と効果の説明可能性を高めるよう求められている状況のことである。本論の成果はこのうち前者に資するものであるが、個々のツアー内容の分析結果と効果との関連性の説明は未だ残された課題である。また、やはり繰り返したが、財務形態や募集・研修形態、広告販売形態などとツアー内容との関連性の分析も今後の課題である。本論は、そのいずれの課題においても前提として必要な、分析基準の構築に取り組んだものである。

**謝辞：**本研究はJSPS 科研費若手 B15K21253 の助成を受けたものである。

#### 【補注】

- (1) 長崎国際観光コンベンション協会職員からの聞き取り(2016年3月1日)。
- (2) なお久保田美穂子は筆者の JSPS 科研費助成研究の研究協力者である。また筆者は執筆時点で沖縄・京都・長崎・広島・岩手の10団体16コースに参加した。那覇まちま〜いスタッフ会議の参与観察は計15回行っている。

- (3) 県外出身(移住4年目)のあるガイドは、出身を尋ねられることにナーバスであり、「100年住んでます、と答える(ごまかす)ことにしている」と語った(2015年12月5日聞き取り)。
- (4) なお筆者はこのコンテストの本選審査員を務めた。

#### 【参考文献】

- 1) 久保田美穂子・吉澤清良(2014): 今日的「まち歩きガイドツアー」に関する考察、第29回日本観光研究学会全国大会学術論文集、p. 81
- 2) 茶谷幸治(2012): 「まち歩き」をしかける—コミュニティ・ツーリズムの手ほどき、学芸出版社、pp. 54-58
- 3) 久保田・吉澤(2014)
- 4) 茶谷(2012)
- 5) Cohen, E. (1985): The tourist guide: the origins, structure and dynamics of a role, *Annals of Tourism Research*, 12, pp. 5-29
- 6) 久保田・吉澤(2014)、p. 84
- 7) Williams, P. (2013): Performing interpretation, *Scandinavian Journal of Hospitality and Tourism*, 13(2), pp. 116-117, 121, 123
- 8) 久保田・吉澤(2014)、p. 82
- 9) Lugosi, P. & Bray, J. (2008): Tour guiding, organisational culture and learning: lessons from an entrepreneurial company, *International Journal of Tourism Research*, 10, pp. 473-474
- 10) 茶谷(2012)、pp. 89-94
- 11) 久保田・吉澤(2014)、p. 82
- 12) Smith, P. (2013): Walking-based arts: a resource for the guided tour? *Scandinavian Journal of Hospitality and Tourism*, 13(2), p. 104
- 13) Smith, P. (2013), p. 104
- 14) Smith, P. (2013), p. 110
- 15) 高岡文章(2014): 観光とメディアとルート—ルート観光論へ向けて、*観光学評論*、2(1)、p. 37
- 16) WYNN, J.R. (2011): *The Tour Guide: Walking and Talking* New York, The University of Chicago Press, Chicago, pp. 158-168
- 17) 橋本和也(2011) 観光経験の人類学—みやげものとガイドの「ものがたり」をめぐる、世界思想社、pp. 88、94-95
- 18) Smith, P. (2013), p. 108
- 19) アーリ、J.、吉原直樹・伊藤嘉高訳(2015): モビリティーズ—移動の社会学、作品社、pp. 130-132
- 20) 茶谷(2012)、p. 48
- 21) 橋本(2011)、pp. 110-111